

令和7年度
すくわくプログラム活動報告書

(実施対象：2歳児クラス)

モニカ都立大園

Monica

テーマ

植物の循環

設定理由

1歳児クラスの際に、葉を落とした木に出会いそこから葉や根を見てきていた子ども達。2歳児に進級すると桜の木との出会いがあり、そこでは桜の花の動きや、色、感触に心を寄せ、“観察”ではなく“対話の相手”のように関わっている姿が印象的であった。このような、1歳児の頃から育まれてきた自然に対するまなざしを継続しようと、テーマを「植物の循環」と決めた。

対象クラス

2歳児クラス・12名

活動のねらい

植物との共感的な関係性を育む

問い

「なにか聞こえる？」
「なんて言ってるかな？」
「なにか出てきたね」

活動期間

令和7年5月～11月

活動回数

計15回

活動①

葉を映して緑の世界を楽しむ

準備物

三面鏡 | 葉(桜)

環境構成

園庭、子ども1~2人、保育者1~2人



活動②

新緑を投影した空間で遊ぶ

準備物

白幕 | プロジェクター
オーガンジー(緑) | 葉

環境構成

ホール、子ども2~3人、保育者1~2人



活動③

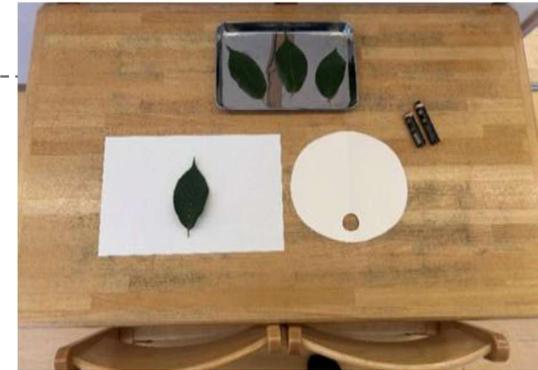
葉を描く

準備物

銀トレイ | クレヨン(黒)
白画用紙 | 葉(桜)

環境構成

部屋、子ども2人、保育者1~2人



活動④

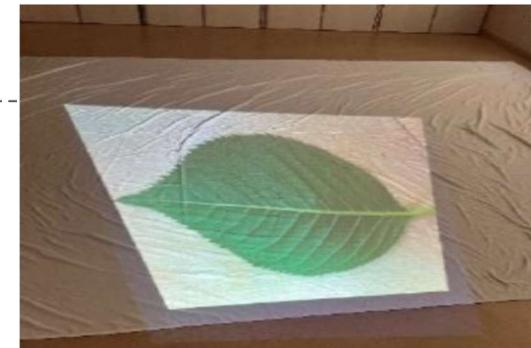
葉を投影した空間で、葉の世界を旅する

準備物

プロジェクター | 白幕 | パソコン | 桜の葉の静止画

環境構成

ホール、子ども1~3人、保育者1~2人



活動⑤

水の通り道を見る（赤の食紅水に葉をつける）

準備物

銀トレー | 花瓶(小) | ポトス | 赤食紅水

環境構成

部屋、子ども1~3人、保育者1~2人



活動⑥

水の通り道を見る (食紅水につけた葉を観察する)

準備物

花瓶(小) | ポトス | 赤食紅水

環境構成

部屋、子ども2~3人、保育者1~2人



活動⑦

水の通り道を見る (食紅水につけた葉を観察する)

準備物

花瓶(小) | ポトス | 赤食紅水

環境構成

部屋、子ども2~3人、保育者1~2人



活動⑧

茎の中の水の流れを見る・感じる

準備物

銀トレー | 透明カップ | ポトスの茎 | 赤食紅水

環境構成

部屋、子ども2~3人、保育者1~2人



活動⑨

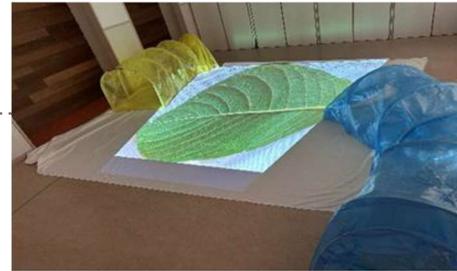
茎を通る水になりきって遊ぶ

準備物

トンネル | 葉の静止画(桜)
プロジェクター
ポリ袋に入れた水 | オーガンジー(白)

環境構成

ホール、子ども3人、保育者1~2人



活動⑩

根を知る

準備物

根(ポトス) | 花瓶 | クリップライト
黒画用紙 | ライトテーブル

環境構成

部屋、子ども2人、保育者1~2人



活動⑪

葉・茎・根の繋がりを描く

準備物

根(ポトス) | 花瓶 | クリップライト
黒画用紙 | ライトテーブル

環境構成

ホール、子ども3人、保育者1~2人



活動⑫

園庭の植物と共に生きる 土に触れる

準備物

根(ポトス) | 花瓶 | クリップライト
黒画用紙 | ライトテーブル

環境構成

園庭、子ども3人、保育者1~2人



活動⑬

土と植物を組み合わせて遊ぶ

準備物

土 | 枝 | 葉 | 台

環境構成

園庭、子ども3人、保育者1~2人



活動⑭

桜の木を描く・こもまきをする

準備物

絵の具 | 筆 | シート | 模造紙 | 透明トレー | イーゼル
今までの桜の活動の写真 | さらし | わらこも

環境構成

駐輪場、桜の木の下、子ども3人、保育者1~2人



活動⑮

桜の木を投影した空間で遊ぶ

準備物

プロジェクター | 桜の葉 | 白幕 | 衝立 | 描いた桜の木

環境構成

ホール、子ども3人、保育者1~2人



活動① 葉を映して緑の世界を楽しむ

R7年5月



園庭の木々の下に三面鏡を置き、鏡の中に新緑の緑が溢れるよう環境を設定した。子どもたちは鏡の中を覗くと、わくわくした表情で周りの葉を手に取り鏡の中へと持っていく。

「ほら見て、ここにもあったよ」と、様々な角度から映る手元の緑の世界に吸い込まれていく。自分が手元を動かすと、鏡の中の世界も変わっていく。そんな変化を楽しむ子どもたち。

「はっばさんの顔あった」「緑のお洋服好きなんだって。だって今日も緑がいっぱいだよん」そんな言葉からは、葉に親しみながら新緑に心を寄せて自分の世界を広げていく様子が詰まっていた。

自分の動きと鏡に映る緑がリンクする体験を何度も繰り返し、葉と子どもの距離がぐっと近づく時間となった。

じっと鏡の中を見つめる子もいた。手に持つ葉を変えて何度も鏡に映し出したり、手を動かして映り方を変えたりと、言葉はなくとも何かを感じる表情やその子の動きが見られた。その世界に魅了され吸い込まれるように没頭する姿も子どもが探究をしている時間であり、その物と対話をしてる時間であることを保育者が念頭に置き、一人ひとりの探究の時間に寄り添っていった。

活動② 木を投影した空間で遊ぶ

R7年5月



本物の葉っぱと緑のオーガンジーを用意し、子どもたちにとって身近な自然の映像を投影した空間で遊んだ。画面に映る木々と自分の影が交わる様子に「ひらひら～」「ばらばら～」と葉を揺らしたり、身体を動かして影と重ね合わせたりしながら楽しむ姿が見られた。また、緑道が映し出されると「散歩したところだ」と気付いたり、「ここは園庭の木だよ」と伝えると「さっき遊んだところだ」と答えるなどデジタル空間の中でも“自分たちの知っている場所”に触れられることで、より親しみをもって活動に関わる姿があった。

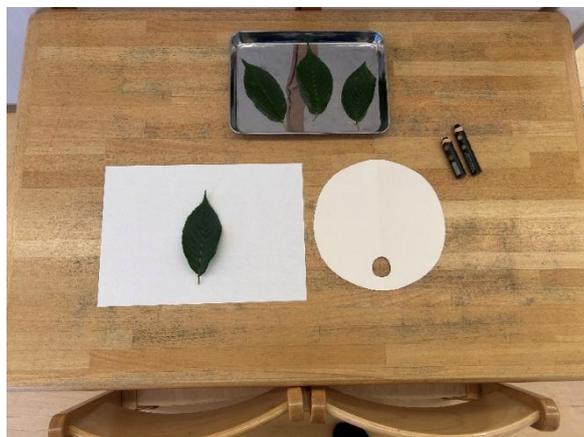


遊びが続く中で、「葉っぱさんと寝る」と言いながらそっと横になる姿が。葉っぱを布団に見立てて身体にかけ、葉っぱと一緒に休んでいるように穏やかに過ごしていた。しばらくして起き上がると、「葉っぱさん、起きて～」と言葉をかけ、葉っぱに気持ちを向けるような関わりへと遊びが広がっていった。

身近な自然の映像を取り入れることで、子どもたちの“知っている場所”として安心感を持ちながら活動できた。投影される新緑の動きに合わせて葉を揺らすなど、自然の心地良さを改めて感じ、興味を深めていく。本物の葉とオーガンジーを組み合わせた環境は素材への関心を高めるだけでなく、自然との関わり方を多様に広げるきっかけとなった。

活動③ 葉を描く

R7年6月



葉の形に着目して、葉を描く活動をした。

まずは白い紙の上で葉の形や特徴をじっくり見た。「ここどうなってる?」「どんな形?」「なにがあった?」と子どもたちに問う。「チクチクあった」「トゲトゲ」「丸だった」と形を捉える子、「ツルツル」「ザラザラ」と感触を感じる子と様々であった。



観察をしていると、葉脈に気付いた。隣の子に「ここせんせんあるよ」と伝え、2人で興味深そうに覗く。「線があったの?なんの線だろう」と保育者が問うと、「うーん、アリさんが通る!」「線路。電車くるよ」など、線をそれぞれの見方で捉えていた。白い紙の上での観察の後、紙と黒クレヨンを出すと描き始めた。

静かに黙々と手を動かしていく。時折また葉を手にとったり、形をじっと見たりしながら、手元に広がる自分だけの葉を描いていく。「ほら、ここはトゲトゲでしょ?」「せんせん(線)できた。アリさん待ってるの。」「線路、ほらここに電車きたよ」「せんせん(線)の電車乗るの」

子どもたちは、ただ形や感触を捉えるのではなく、葉の上に広がる小さな世界を見つけ、その中で見つけたものと心を通わせていた。

大人が「葉」として一括りに見てしまうものも、子どもたちには新しい発見となる。「知らないからこそ見える世界」を大事にしながら、子どもと葉の関係性を深め、共感的な関わりへと繋げていきたい。

活動④ 葉を投影した空間で、葉の世界を旅する

R7年6月



葉脈や形がよく見える桜の葉を拡大して床に投影した空間を作った。

この空間に来るなり、「大きい葉っぱさん」と嬉しそうに投影された葉を見つめる子どもたち。

膝と手を付き、葉脈に沿ってハイハイをする。「何してるの？」と問うと、「せんせん(線)、お散歩してるの」と教えてくれた。「いいお散歩だね、どこまで行くの？」と問うと、「葉っぱさんの中、全部行くの」と答える。葉脈を一つの道として子どもは葉の世界を見ていた。

他にも、太い線を指さし、「葉っぱさんお顔あった」と言う。「ほんと？どんなお顔が見えたか教えてくれる？」と問うと、「葉っぱさん笑ってた」と話す。葉脈に子どもたちの思いが乗せられていく。葉脈がただの線ではなく、笑っていると“表情”に見えたとき、子どもたちは葉の中にある命を感じていたのかもしれない。

大人には見えない世界が、子どもの目にはたくさん映っていることを、空間に没入する体験を通してより感じることができた。私たち大人が見落としてしまう気持ちや命の流れを感じさせてくれる子どもたち。プロジェクターを使って世界観に没入できる体験は、子どもたちの感性を大きく揺らし、新しい気づきを芽生えさせてくれた。

活動⑥ 水の通り道を見る(食紅水につけた葉を観察する) R7年7月



ポトスを食紅水につけた二日後に、葉の変化を観察した。「葉っぱさん、どうなったかな？」と言葉をかけると、「まっかっかになっちゃった」「ごくごくしてくれたよ」と気付く。また、赤く染まった模様を見て「ぽつぽつしてる」「ひえひえ」と表現したり、「はっばさん、びっくりしちゃった」と葉の気持ちを想像したりする姿があった。食紅水を使ったことで、目で見てわかりやすく、下の花瓶から葉までを指でなぞり「ちょろちょろっとお水が通るんだよ」と葉脈の中の水の通りを感じていた。

子どもたちは、色づいた葉の線を見るだけでなく、「水が運ばれている」という仕組みを自分の感覚と結び付けて捉えていた。この経験は、今後の植物や自然への興味を深める土台となると感じた。

活動⑥ 水の通り道を見る(食紅水につけた葉を観察する) R7年7月



ポトスを食紅水につけた二日後に、葉の変化を観察した。「葉っぱさん、どうなったかな？」と言葉をかけると、「まっかっかになっちゃった」「ごくごくしてくれたよ」と気付く。また、赤く染まった模様を見て「ぽつぽつしてる」「ひえひえ」と表現したり、「はっばさん、びっくりしちゃった」と葉の気持ちを想像したりする姿があった。食紅水を使ったことで、目で見てわかりやすく、下の花瓶から葉までを指でなぞり「ちょろちょろっってお水が通るんだよ」と葉脈の中の水の通りを感じていた。

子どもたちは、色づいた葉の線を見るだけでなく、「水が運ばれている」という仕組みを自分の感覚と結び付けて捉えていた。この経験は、今後の植物や自然への興味を深める土台となると感じた。

活動⑦ 水の通り道を描く

R7年7月



食紅水につけた葉(ポトス)と、同じ葉を印刷したもの、黒クレヨンを用意し、「水の通り」を描きながら葉の中を流れる水の動きを表現した。



子どもたちは「のどかわいてるから、おみずかきたい」「ごくごくしてくれるかな」と言葉にしながらかレヨンを手にとった。中には、「いっぱい描いたら、葉っぱさんお腹痛くなっちゃうと思う」と、描く前から葉の気持ちを想像する姿があった。

「ごくごくしてくれた」「ここまでお水きたよ」と葉に語りかけながら線を描いていく。そこには、葉を通る“水の道”を観察して描くだけでなく、葉の思いを想像しながら表そうとする姿があった。

保育者が「のむことができて嬉しそうだね」「もっと元気になったかな」といった言葉を返すことで、子どもたちは葉とのつながりを感じながら、自分の思いを重ねていった。こうしたやりとりを通して、葉に心を通わせるように関わろうとする姿を支えていきたい。

活動⑧ 茎の中の水の流れを見る・感じる

R7年8月



赤い食紅水に茎をつけて、水の減りや色づく茎から、茎の中の水の流れを見る活動をした。

まずは茎に触れ、じっくりと茎を見る。「これなんだろうね」と問うと、「葉っぱのせんせん(線)がここに伸びたの」と話したり、「だれかいるー？きこえますかー？」と茎に話しかけたりする姿が見られた。この時はまだ“水が通っている”というような発言はないが、見えない茎の中の世界に想像を膨らませている子どもたちであった。



「赤いお水にいれたらどうなるかな？」と子どもたちに問うと、

「おみずきもちいい〜っていうんじゃない？」
「おみずがここ(茎)にはいっておうちになるの」
「もっとせんせん(線)がでてきてアリさんもくる」

茎の中にあるかもしれないなにかを想像するまなざしは、ワクワクしていた。

時間が経って水が減り、赤く色づいた茎。

「あれ、おかおがあかくなってるね」と色づいた茎を見て、顔が赤くなったという。それを横で見ている子は、「あかいおみずバスがぶっぷーしたんだ」と話し、食紅水の行方をバスと感じているようであった。「私たちにもおくちがあって、この子(茎)もおくちからおみずちゅーってしたんだ。おくちあるのいっしょなんだ」と、自分の体と重ね合わせる子もいた。

茎の中の水の流れを見る・感じるという活動。単に水の流れを伝えるのではなく、「これはなに？」と一緒に茎をみつめ、「お水につけたらどうなる？」と想像を重ねることで、子どもたちが茎の水の循環に自分なりの物語を見出し、自然の気持ちにそっと寄り添うことにつなげることができたと感じた。活動における保育者のひとつひとつのアプローチを今後も丁寧に行っていきたい。

活動⑨ 茎を通る水になりきって遊ぶ

R7年8月



茎のなかの水の通りを感じた子どもたち。自分たちが水になりきって茎に見立てたトンネルをくぐり、投影された葉に水を届ける活動をした。水に見立てた白のオーガンジーと水を袋にいれたものを用意し、水を自由に持ち運べるようにした。「おみずに変身！」と話し、さっそく水になりきって葉の世界へと飛び込んでいく。

「葉っぱさん、いまおみずもって行くよー」
「はたらくおみずやさんで一す、どうぞ」
「おみず、よいしょしてきたよ。ごくごくできた？」
と、トンネルの先の葉に辿り着くと手にもっていたオーガンジーや水の袋を葉に置きながら優しく語り掛ける。
「おみずさん、何しているの？」と聞くと、「はっばさんにおみずあげたいの」「ゆっくりいくの。はっばさんびっくりしないように」と、水や葉の気持ちを物語っていた。
言葉での表現が少ない子もいたが、動きをよく見ていると、オーガンジーをもってトンネルを抜けたあと、葉の上で「ちゃぼん」と言って寝転がっていた。その一言に、茎を通った水が、葉の上で葉と一緒に眠っているような思いが詰まっているように感じた。



水になりきることで、子どもたちは自然と茎の中を通る水の気持ちに心が寄せられていった。植物の水の循環を支える茎の中を、水になりきって通る。その姿はまさに茎の中を旅しているようで、水の流れを心でたどっているよう。子どもたちの中にある葉の世界に、水の物語が新たに生まれ、葉の世界が更に深まっていくようであった。

体を動かしながら、感じながら、想像を重ねていくことで、より子どもたちが植物に心を寄せていけるのではないかと、改めて感じた。

活動⑩ 根を知る

R7年9月



ライトテーブルの上で、ポトスの根を観察した。「葉っぱさんと茎さんの下に何かついてるよ、これなんだろうね」と問うと、見たり触れたりしながら「これは、骨」「線路みたい」「蜘蛛がいっぱい」と想像を語る。以前に根の活動を行っていた3歳児クラスの友だちを呼び、一緒に根についての話を聞いた。「これは根っこって言うんだよ」「根っこにはお水が入っているんだよ」と教えてもらい、初めて「根っこ」という名前を知った子どもたち。「根っこってお水が通っているんだよね」とつぶやきながら、自分なりに理解しようと、確かめるように触れる姿があった。知らなかったものの名前や役割を、年上児との関わりの中で知ることによって、「根っこ」という存在が子どもたちの中に具体的なものとして形づくられていった。そこで保育者が、これまで行ってきた「葉と茎は水の通り道」という活動に触れながら「ここも何かの道なのかな?」「ここも何か通っているのかな?」と問いかけた。すると、子どもたちは、「アリさんがいる」「誰かが出てくるかもしれない」と想像を膨らませていった。中には、根から葉脈へと指でなぞりながら「しゅーってお水が出てくる」と言葉にし、根から葉の繋がりを感じ取るような姿もあった。

子どもたちは、根の観察を通して根・茎・葉が関わり合っていることに気づき始めていた。見えないところを想像したり、以前の経験と結び付けたりしながら、子どもたちなりに「お水が通っている」ということをイメージしていた。年上児から学んだことをきっかけに、「知る」ことの喜びや不思議さを感じる時間となった。

月



植物の中の水の通りの活動として、プロジェクターを使いポトスの根・茎・葉を繋いだ全体図を投影し、その上から子どもたちが感じる「水が通る道」を黒クレヨンで描いた。初めに「葉・茎・根の中は何が通っている？」と振り返りを行うと「お水」と答える子どもたち。「喉が乾いているみたいだから、みんなでお水を描いてあげよう」と描き始めた。「根っこからお水がグーンってのぼっていくの」と線の動きに気持ちをのせながら描き始めていた。



水が通る道を描いた子どもたちに、「葉っぱさんにお水あげたけど、何か言っている？」と言葉をかけた。すると、「保育園で牛乳とお茶を飲むから、葉っぱさんにもあげたの、飲めたか聞いてみるね」と耳を澄ます。少し経つと、「飲めたって言ってるよ」と嬉しそうな姿を見せた。「お水がお散歩してるの、いろんなところに行けるの、だから嬉しいって言ってるよ」と言葉にする。

子どもたちは、植物を自分の生活や気持ちと繋げて例える姿を見せていた。こうした子どもたちの発想や気づきがさらに深まっていくように、今後も環境を整え子どもたちの思考を支えていきたい。

活動⑫ 園庭の植物と共に生きる土に触れる

R7年10月



オクラの根を掘り返した時から、子どもたちは土を「お布団」として捉えていた。

植物の循環にも大きく関わる土。子ども達はどのような思いを感じているのか。

園庭に出る前に「オクラさんもお砂（土）のお布団にいたよね。園庭のお布団のところにはだれがいるんだろう…。また、オクラさんかな？」と問いかけた。

園庭に出ると「（土が）ここにいたよー！」と教えてくれる子どもたち。

「どこにいたの？誰と一緒にだった？」と問うと、「木さんの所にいたんだよ」「葉っぱさんの所にもいた」と

土のある場所を探すとともにまわりで生きている植物にも目が向いた。

「ここで葉っぱさんたちなにしてるのかな？」と聞くと、「葉っぱさん疲れちゃったから、お布団（土）の上に座ってるみたい」や、「お布団（土）でねんねしたから木さん大きくなったみたい」と、想像を膨らませていく。

土を手に取り、木にかけてあげる姿もみられた。「お布団どうぞ」「あったかいよって言ってるね」と話す。様々な場所の土に手を伸ばし、硬さや柔らかさの違いを確かめる場面も見られた。

子どもたちは、土がある場所を園庭で探す中で、まわりで生きている命の存在に出会い、土の世界をより深く思い始めていた。触れるたびに、そこには土だけでなく、木や葉っぱ、虫や石、たくさんのつながりがあることに気づき始めた瞬間だった。

“ただ足元にあった存在”だった土が、子どもたちの中で「植物や生き物と出会える場所」へと姿を変えていく。

そこに生きる命と出会ったことが、土への興味をさらに静かに広げて行くのではないかと感じた。

活動⑬ 土と植物を組み合わせて遊ぶ

R7年10月



園庭で土と植物を組み合わせて遊んだ。

台の上に土を敷き、銀トレーに葉・枝・どんぐりをのせて台の横に設置し、自由に素材を選択できるようにした。

葉をたくさん持ち、土に乗せて“ぎゅぎゅ”と両手で優しく土と葉を合わせる。

「葉っぱさん、一人じゃ寂しいからお砂（土）さんと一緒にしてあげたんだ」と、葉と土を組み合わせることで植物と土の寄り添いを表現。

その会話を横で聞きながら手を動かしていた子に「お砂（土）さんっていつも一人なの？」と聞いてみた。すると、「一人だよ。どんぐりもひとりなの」と話す。「一人は寂しいのかな」と聞くと、「一緒に遊ぼうよって言うてるから今いっしょに遊んでるの。寂しくないって」と答えながら、手元では土・葉・どんぐりを組み合わせていた。

土の上に枝を置いてみる、落ち葉を乗せてみる、木の枝をさしたり、自分の手でやさしく包んだり…。その時間はまるで、わたしと土と植物が会話しているかのような感覚だった。子どもたちは土と植物の会話に入り込むように、葉や木の実を動かしたり、土を寄せたりする。

子どもたちが自由に素材を手に取りながら、“いのちが寄り添う世界”を感じ、ありのままにする表現を、受け止め、ともに共感し、その一瞬一瞬の感覚や気持ちを大切にしながら、日々の小さな発見を子どもと共に楽しんでいきたい。

活動⑭ 桜の木を描く・こもまきをする

R7年11月



現在の桜の木を、さらしや模造紙に描く活動を行った。木や葉の色の絵の具を4色用意し自然の変化(循環)を感じられるように、4、5月の活動の写真をイーゼルに貼って見られるようにした。イーゼルは、自然と目の行く場所に設置した。初めに4、5月からの木の変化を聞いてみると、「葉っぱさんお家に帰っちゃった」「茶色と黄色が多くなった」「お仕事行っちゃった」と葉が色づいたり、少なくなったりする変化を自分のなかで物語を作り、感じとる姿があった。

子どもたちの感じる“木の声”を聞いてみると、「寒いって言っている」と想像する。保育者は「寒いんだね。それじゃあ、どうする?」と尋ねた。すると絵の具を指差し、「これかいたらありがとうって言うかも」と答え、描き始めた。「ぬりぬりしたからあったかいって」「ありがとうって言ってるよ」と言葉にして、絵の具で葉を付け足すことにより木が暖くなるというイメージを持ちながら、木に寄り添おうとしている姿があった。横塗りではなく“ちょんちょん”と上から色をつける子もいた。「これは、葉っぱが落ちてるところだよ」と葉っぱの動きを表現していたことを教えてくれた。



その後、こも巻きを行った。葉を落とした木々を見て「寒そう」「寂しそう」と話していた子どもたちであったが、寒い冬を越すためのこもを巻くと、「お洋服を着させてあげたの。これであったかいよね」「あったかくなるまで、いっぱい寝てね」など、木々の気持ちに寄り添うように声をかけていた。こうした姿から、子どもたちはこれまでの活動や日々の自然との関わりを自分の中で受け止め、感じたことを表現や行動に移していることがわかる。木の気持ちを想像し、表現活動を通して寄り添う経験を積むことで自然の変化や植物の循環に気づく力が育っていると感じる。

活動⑮ 桜の木を投影した空間で遊ぶ

R7年11月



子どもたち描いた桜の木を上から垂らし、その空間に桜の木を投影した。光と紙、布が重なり合う不思議な空間に入ると、子どもたちはすぐに興味を示し遊びに入っていく。活動を通して季節の循環を感じ取ってきた子どもたちは、床にある落ち葉を拾って投影された桜の木から「ひらひら～」と落とすようにしてみたり、自分の描いた作品を「ゆらゆら～」と揺らしてみたりと、光と葉、木の動きを組み合わせながら遊びを深めていた。

が「葉っぱさんがひらひらって落ちてきたけど、木さんどうかな？」と問うと、投影された桜の木を見上げ「葉っぱさん落ちたら、木さんだけになって悲しくなっちゃう」と話す姿があった。その言葉に共感するように近くにいた子どもたちも、桜の木を見つめたり、自分の描いた葉をそっと触りながら木の気持ちに思いを寄せていた。その後、ひとつひとつの木に近づいて抱きしめたり、落ち葉を拾ってそっと貼り付けたりする真似をしていた。「みんながキューしてくれたから涙がとまって、嬉しいって言ってるよ」と優しく言葉にする姿があった。

この姿を通して、自然に触れる体験や感じたことを形にできる表現活動、「木さんどう思うのかな？」と気持ちを想像する言葉がけを丁寧に続けることの大切さを改めて感じた。



使用物

白布 | ダンススカーフ(オーガンジー) | わらこも

テーマ：植物の循環

全体の振り返り

8カ月に渡り植物と向き合う中で、子どもたちは対話の相手として植物との関わりを深めていった。循環に心を寄せながら、目には見えない生命の動きを想像し、自分と重ね合わせながら共感的に関わる姿が印象的であった。植物との継続的な出会いが、子どもたちの感性や探究心を育てていたように感じる。保育者として子どもたちとまた一から植物の循環を知り直していく中で、子どもたちの言葉や共感的に関わる姿から、植物は「自分と共に生きるもの」「愛おしく大切なもの」と感じるきっかけをもらえた。8カ月を通しての植物へのまなざしが、今後も子どもたちの心の中に残り続けていくことを願う。

終



株式会社モニカ

〒105-0004
東京都港区新橋1-9-5 KDX新橋駅前ビル 3F
TEL:03-6661-2466
FAX:03-6661-2467

モニカ都立大園

〒152-0034
東京都目黒区緑が丘1-2-14
TEL:03-5726-9145
FAX:03-5726-9146